

沖縄をみつめる (96・10・24)

植木光教 (昭22・文乙)

今ご紹介頂きましたように、昭和22年に卒業いたしました。大学は東京に参りました。その後NHKに一時勤めておりまして、更に国会議員の秘書をやりました。その国会議員が北海道知事になられましたので、北海道庁に入りまして知事室長という仕事をやらせていただきました。そして京都に帰りまして参議院議員に、亡くなられました永末英一さんが衆議院に変わられましたんで、その補欠選挙がございまして、それに出まして五期務めさせていただきました。第一期目は永末さんの残りの期間でございましたんで満30年ではございせんけれども、五期30年近くの間、国会で働かせていただきました。

その後、今お話ありましたように運輸審議会というのがございまして、これは運輸政策審議会とは別でございしますが、常勤の審議会で、6名で作られておりますが、その委員を、1期3年、2期6年間務めさせていただきました。これは実は総理の辞令による仕事でこ

ございました、運輸行政全般の許認可事項については、全てこの審議会の答申によって初めて決定されるという機関でございます。大変いい勉強をさせていただきましたが、並行いたしましたいろいろな仕事もさせていただき、今日主として今お話の日本教育協会の会長と理事長を兼任いたしておりますが、これは30数年続いている協会で、教育問題、文部省関係の団体でございます。その他通産政務次官もやりましたので、通産省関係の社団法人三つの会長も致しております。その他いろいろなことをやっておりますが、今日は私に沖縄の話をしろということでございます。

沖縄が復帰しましたのは昭和47年でございます。私が総理府総務長官兼沖縄開発庁長官となりましたのは49年でございます。従って復帰2年後であります。私の前の長官は3ヶ月ないし6ヶ月で辞めておられまして、私は約2年近く務めました。その故をもちまして、今日に至るまで沖縄とは深い関係をもたせていただいているのでございます。第5代沖縄開発庁長官でございました。

開発庁長官を辞めましてから直後に、沖縄の方々から、是非党の沖縄振興委員長というポストを植木にやらせろ、という要望が参りまして、亡くなられました斉藤邦吉幹事長からこんな話があるが、やってみるか、ということでありましたので、喜んでやらせていただきますようにということで、予算委員長を務めましたり国会対策委員長、或いは外交相互

安全保障の委員長を務めました以外の期間は、退任いたしますまで私がずっと沖縄振興委員長を務めたわけでございます。従いまして、沖縄には「植木会」という会もつくっていただくくらい大変各方面にわたりました。沖縄の振興・開発のためにいろんなご意見を聞きながら努力をし、また今日に至っているわけであります。

私はいちばん最初沖縄に参りましたのは、諸先輩のほうが早いかもしれませんが、昭和37年復帰の10年前でございまして、当時はご承知のように渡航証明書を持って行かなければ沖縄へ入ることができないという時でありました。その頃はまさに荒廃しきっております。沖縄の人達の心も荒れ果てておりました。また沖縄の住民の方々は、一部アメリカへ留学したりなどするようなエリート層は別と致しまして、沖縄で織りました古びた絣を着、中には草履で裸足同様の生活をしておられるというのが今でも深い印象として残っているのであります。その頃、後に知事になられました屋良朝苗さんがまだ教職員会の会長でございました。この方は、実は数年前から病床についておられまして、もう人生の終わりに近づいておられる状況であります。私はそのお若い時から大変親しくさせて頂きまして、後ほど参議院に出て来られました喜屋武真栄さん、今は辞められてちよつと体を壊しておられますけれども、この方がこの教職員会の書記長でございました。そういう関係で、このいわば沖縄県民、そのときは県ではございませんで、琉球であります。その

人々の声を代表するような方、又お二人を中心とする方々と親しくさせていただきまして、何回かお会いしながら10年を経過して祖国復帰を果した。そしてその2年後に長官になったというようなことでございます。従いまして、復帰前からの沖縄の状況を知っているとというようなこともございまして、考えてみれば長い長い沖縄との関係があるわけでございます。

復帰をいたしました直後は、ご承知のように皆大変喜んであります。いろいろ復帰問題の処理につきましまして働きました若泉敬君がこの間亡くなりましたけれども、これは私の大学の後輩でございまして、その後、京都産業大学の教授などしておられましたんで、沖縄復帰の日米間のいきさつ等についても詳しく彼から聞いておりますが、いずれにしても復帰したということで大喜びしたというのは、これはもう当然のことでございます。ここで国といたしましては何かとしてこの沖縄を荒廃した状況の中から振興させなければならぬということ、沖縄開発庁をつくりまして、そしてその立ち上がりのひとつのイベントといたしまして、昭和50年に沖縄国際海洋博覧会を計画したことはご承知の通りでございます。この所管は通産省と沖縄開発庁でございました。ところがその直前の昭和48年には、ご承知のように石油ショックが起り、大変なインフレ状態となり、また国の財政もとても苦しい状況になって参りました。そこで、この博覧会を暫く延期しようかというこ

とになったのでございます。と言いますのは、公共事業を非常にあらゆる面でやらなければなりません。何しろ会場を北部の本部という所に設定いたしました。従って高速道路を造らなきゃいけない。或いはホテルなども造らなきゃいけないということで、その他いろいろな事業を一拳にこの沖繩立ち上がりのためにやらなければならぬのに対して、国が金を出さなければならぬが、国は大変苦しい。延期論まで出たんでありますけれども、私は三木内閣の開発庁長官として、沖繩の振興開発の起爆剤として他の府県の公共事業等を削減しても、是非実現してほしいと発言し、諸準備をどんどん進めまして50年の7月1日からの開会に間に合わせたというような状況でございました。

この頃、ひとつの逸話になります。いわゆる内奏というのがございます。昭和天皇に対して所管の大臣が自分のもつております諸問題をご説明申し上げます。私は総理府総務長官もいたしておりますので、当時は独占禁止法の改正問題も私の所管でございましたし、国際婦人年にも当たりましたし、まあいろんな仕事をたくさん抱えてたわけでございます。総理府総務長官は掃除府雑務長官だといわれたような状況でございますが、そういういろんな仕事を進めていきます中で、私は何度も沖繩を往復しながら沖繩の方々といろんな話をし、特にひそかにあれを成功させてほしいということを申し上げ、そして皆もいろいろと協力してくれました。一部教職員団体は、屋良さんがもう知事になっておられましたたけ

れども、この方は賛成でありましたが、教職員団体のみならず労働組合は海洋博覧会反対というような状況でありました。まあいろんなそういうような問題を抱えておつて、内奏のときにいろいろ陛下に申し上げましたが、これは一対一で侍従長も誰も入らないで、一対一でやるわけでございます。いろんなお話をいたしまして、いろいろご質問があります。必ず言われましたことは、沖縄県民は今どんな生活状態か、沖縄県民は今何に困っているか、沖縄県民にはどれだけのことをやってあげているのか、というようなお話とともに、私も一度是非沖縄に行きたい、と。できればこの海洋博覧会に出席をしたい、と。これはいつも昭和陛下がおっしゃっていたことでございました。私は、これはもちろん口外はできないことでありますから口外はいたしませんで、いろいろ現地とも連絡を密にし、いろいろ努力したんでございますけれども、ついに昭和天皇はこれに参加されることはできず、その後も沖縄のことをお心に懸けられながら、ついに沖縄の土地をお踏みになることはできませんでした。

ただ、皇太子両殿下は、今の平成天皇でございますけれども、開会式にも出られましたし閉会式にもご出席になりました。

開会式の前日に両殿下にお供して那覇空港に着きましたところ、あれだけ騒いでおりましたのに飛行場は日の丸の旗を持った県民が約一万人ぐらい集まっております。両殿下

をお迎えをしてくれていたのです。それから、いちばん先に摩文仁の丘、最後の悲惨な戦場に行かれたのでございますけれども、これも沿道ずっと日の丸の旗を持った県民が迎えてくれた。ただ悲しいことに、二つ事件が起こりました。途中、ある病院から火焰瓶が投下された。これはうまく自動車が斜行しましたんで当たりませんでした。

「ひめゆりの塔」に行かれました時に、私は真後ろに立っていたのでございますけれども、ひめゆりの塔の前でお二人が白菊の花束を捧げ、深々とお辞儀して、そして頭を上げられて横を向かれた途端に、ひめゆりの塔の中からゆつと二人の男が鉄兜を被って出て参りまして、そしてあつという瞬間にお二人の捧げられた白菊の上に火焰瓶を投げ落としたのでございました。一面にもうもうと炎が上がりました。まさに間一髪でございました。横をお向きになって、私も後ろに付いておりましたのですぐ横に向った。もしも、それこそ一・二秒といったらちよつと大袈裟かもしれませんけれども、ほんの数秒の差でお二人とも、また私も、その大きな火焰の中に包まれることがなくて無事に助かったわけでございます。これに関しましていろいろな申し上げたいこともございますけれども、例えば、今はひめゆりの塔の横には「ひめゆり会館」ができておりまして、大分開けておりますけれども鬱蒼たる森の中でございました。で、大勢の人々でございましたので、阿鼻叫喚という状況でありましたが、皇太子は「あの方はどうなりました。大丈夫ですか」と私に向

つておっしゃいました。あの方というのは、「ひめゆり会」の同窓会長さんである源さんという、この間亡くなられたお婆ちゃんでございますが、この方のことでございます。その人から戦争当時のお話をお聞きになる為に左を向かれたわけでございます。私は皇太子の深い思いやりに非常に感動いたしました。同時に、その真後ろに美智子妃殿下がおられまして、その後ろに私がおったんでありますが、美智子妃殿下の手を女官長がとりましたところ、「大丈夫だから放して」とはつきりとおっしゃいました。ところが、その後出ました週刊誌には、〃その時「キャッ」と悲鳴をあげた美智子妃殿下〃というのが出たのであります。まあなんと。数日後、これは異例のことではありますが、皇太子妃の女官長さんが、新聞に「そんな事実はありません。嘘だと思つたら植木総理府総務長官にお聞き下さい」と憤りの投書をされました。

今日はジャーナリストの大先輩がおられますけれども、情けないことにその時、二人の火災ビン男がニュッと現われた写真は一枚もないんですよ。それほどカメラマンも皆仰天をしてしまったんです。もうひとつ、警察の大先輩があそこにおられますけれども、実は阿鼻叫喚でどうしていいのかわからない時に、現場には警察庁長官以下沖繩警察本部長はもちろんでございますけれども、警察幹部は皆一緒だったんですが、それに対して何ら収拾の声をあげず手も打たなかった。ただ私のSP、警備官の、今は警視庁の署長を経て、

警察学校の部長をしております岡田という警察官が「車の方へ向かって下さい、車の方へ」とこう叫びました。まさに適切な指示でありまして、どっと車の並んでいる道路の方へみんな向かいましたために、やっと収拾されたというような状況でありました。後ほどそれを警視庁の幹部に申しまして、岡田君に警視総監賞を出していただきました。

そういうような事がありました。このお話をいたしますと、何故ひめゆりの塔の中まで警察官——何千人というものが他府県からも警備に行っていたわけですね。特にさとうきび畑の中に、警察官が2・3メートルおきに警備をしなきゃならんというような状況で大変な警備ぶりだったんでありますが、何故ひめゆりの塔の中までちゃんと調べておかなかつたのかと、こういう声をよく聞くのでございます。これは沖縄県民の心を重んずるためであったということを上げたい。私は長い間県民の方々と深くお付き合いをいたしました。本当にそれがつくづくとわかるようになりました。あのひめゆりの塔の内部は「聖地」なのであります。ご承知のように若い女子学生が大変な犠牲を払った場所でございます。健児の塔というのも建っておりますけれども、しかしこれは塔でありまして洞穴ではございません。そこでその沖縄の警察官の方々及び沖縄の県の首脳部たちも、あの中だけは入らないでほしい、と。こういうことでありましたので、警察はこれを搜索しなかった

のであります。それでその二人の人間が内地から行きまして潜入していた。その心です。あの戦争によって多くの犠牲者を出した。特に典型的に最もかわいそうな、あの若い少女たちの犠牲、その場所は聖地なんだ、と。沖縄県民にとっては聖地なんだ、ということでおきたいのでございます。従いまして、この戦争によって受けました大きな打撃というのが、今日までずっと続いているわけでありまして、最近のあの基地の問題にもつながっているでございます。

今度の基地問題に関連しまして、沖縄では一部前からもございましたけれども、沖縄独立論すら出たのでございました。これは後に申し上げますけれども、私が長官に就任いたしましたして暫くたちまして、昭和五十年の四月、今度と同じような事件がありました。四月十八日と記憶しておりますが、金武町——「金」という字と武士の「武」と書きまして「きん」と読みますが——この金武町のビーチで真昼間でありまして二人の女子中学生が二人のアメリカ軍人に石で頭を殴られましてレイプされたという事件があったのであります。私は大変驚きますとともに、大きな問題となりました。そこでこういうことは今までにも何回かあったのではないかとということで、警察等を通じまして調べましたら、表に出ないがこういう事件がたくさんあったと。真昼間に起こったビーチでの事件でありました

から大きく出たけれども、もうしょっちゅうこういう事件は今までもあったことでありました。何が問題かという点、もちろん基地が問題でございませけれども、それに対してどうしてそれが公にもならないのかというのは、行政協定というもののネックがあったからでございます。

すなわち、そういう犯罪を犯しましても、そのような事件を犯した者を日本側で、県側で逮捕したり拘置はできませんので、いわゆる起訴がされた時に初めて身柄が移されるというのが、日米間の行政協定でございます。地位協定でございます。韓国では、ご存知だと思いますけれども、沖縄よりもずっと弱い立場にございますんで、韓国は今でもですね、そういう事件が起こりましても身柄はアメリカ側が持っております、そして裁判にだけ出て来るといふような、或いはもう飛行機で逃げて帰ってしまうといふような状況です。ドイツはさすがといったらおかしい言い方かもしれませんが、この地位協定では直ちに身柄をドイツ側が引き受けるということになっております。それで私は閣議で発言をいたしました、この地位協定というものはまことに片務的なものである。またこういう悲惨な事件に対して公務上いろいろなことがあったというのならばまだしも、全く私的な凶悪な犯罪を犯した者に対してさえ、直ちに日本側が身柄を受け取ることができないといふような地位協定は、これは即刻改正すべきであるといふ発言をいたしました。それに対して三木

さんはすぐ、当然そうだといいことでありました。それからまた他の閣僚も数名そんなことはけしからんというようなことでありまして、総理から「今の総理府総務長官、開発庁長官の発言を直ちに外務大臣は外交によって改正するように」、という指示を出されたのでありますけれども、その後もずっとそのままであつて今日に至つたわけです。

そして去年の九月のあの事件が起つてしまつた。これがまあ、爆発的な怒りというものになる。そしてそれが更に進んで、ちよつどその基地の問題というものになつたといふことなのでございまして、あの場合、大騒ぎをいたしましたので、暫くは自分のところに置いておきましたけれども、一週間ぐらいたつて身柄を起訴前に移しましたが、まああの地位協定というのはこれまた今回のような沖繩の方々の大きな怒りというものを、自らの、県民の背負つてきた戦後五十年の犠牲といふふうに考え、最近十一月までにこれからの沖繩県づくりと、この基地問題についての今後のあり方についての結論とまではいきませんけれども中間的な決定が行われることになっております。しかしやはり細かいように思われるかもしれませんが、私なんかでも、もう昭和五十年に考へて閣議でわざわざ発言をして、みんな閣僚がそうだといい、そして外務省にやれと言つたことを外務省はどうとう全然やらなかつたといふようなことですね。これはもう戦後五十年、復帰後二十五年になりますけれども、二十五年のあいだにいろいろな施策を国はいたしましたけれども、沖

繩の人々の心はまだ本当の日本人になりきれないでいる。なりきろうとするんだけれどもなりきれないでいる。

今、病気になって倒れられて今度の選挙には出られませんでしたが、西銘さんという知事が自民党から出ておられました。この西銘さんという方は、沖縄の那覇の市長もやられ、そして衆議院に出て知事になり、また衆議院に出たという極めて立派な方であり、また良識のある方でございますけれども、この方と2人で一緒に飲んでおりましたときに、西銘さんがつくづくとおっしゃいました。「植木さん、私はどうしても日本人になりきれないんですよ。」と。「どうしてですか。」と言いましたら、「やっぱり本土と沖縄の間にはまだ格差がある。それはもう基地でちゃんと証明されている通りであるけれども、我々の心を未だに、日本人全部とは言わない。非常に理解を下さっている方もあるんだけれども、政府自身がそのことを理解してくれない。」と。「沖縄の人の心を知ってくれない。だから私は日本人にまだなりきれないんだ。」と、こういうことをおっしゃったのでございます。これは私は重要な発言であると思うんでありまして、これもひとつ皆様方に頭の中に置いておいて頂きたいと思っております。

今新しく出しております沖縄県の国際都市構想、これはやはりひとつのこれからの沖縄県づくりの目玉になっていくというふうに思います。私が向こうへ参りました時には、ま

あ毎年何回も行っているわけですけども、長官として行きました時にはナシヨナルも土地を持っておりました。トヨタも土地を持っておりました。ところがそれはその後ほとんどみんな放棄しました。放棄というより寄付したり、安く売ってしまいました。工場を建てるまでに至りませんでした。その理由としましては、潮風が吹くからだとかいうようなことで、精密な機械には対応できないというようなことを理屈として言っておりますけれども、これなどは実は始めからわかつていることでありまして、ひとつには沖縄の労働運動を始めとする、また沖縄県の人たちの、対本土に対する感情、特に経済問題になりまして、非常なアレルギーがあります。そういうようなものを読み取って、なかなかこちらから進出する企業はないという状況でございます。それは今もずっと続いております。で、私はそのことを読み取りまして、長官及び沖縄振興委員長を続けております時に、申しました。沖縄のもつ今後の産業ということについては、やはりひとつには農業であります。それから私はサトウキビとパイナップルだけを作っているだけじゃあ、これはもうだめですよ、ということ、ここで野菜を作りなさい、花を作りなさい、果物を作りなさいというのを奨励をいたし、それに対する予算をずつつけてまいりました。最近になりました、もう大分になりますが、その後それに応えてくれまして、野菜が冬の間にこちらに來ましたり立派な蘭だとかその他菊だとかというような、花の栽培が始まったりもしております。

す。漁業に關しましては、海で泳いでいる魚をとるだけが漁業じゃありませんよ。魚はつくらなきゃだめですよ。いわゆる養殖でございますけれども、これを大いに奨励をいたしまして、今これもだんだん実を結んできております。それから私、驚きましたのは、今は皆さんは価値を充分ご存知でございますけれども、紅型でございますとか八重山上布でございますとか、或いは久米緋でありますとか、陶磁器でございますとかいうようなもの。或いは舞踊を始めといたしまして、いろいろな芸術文化、すなわち伝統的産業・工芸品と、それから琉球独特の文化・芸能というものの良さを沖繩の方々が充分に自ら自覚していない、認識していない状況でございましたので、これを大いに奨励をいたしまして、そのためのセンターも多くの島々に創りましたし、また伝統的産業工芸品といたしまして、国が認定をいたしましたりなどしてそういう産業を興すことに力を入れてまいりました。これは最近よく認められてきていることを嬉しく思っております。

現在は基地問題が大きな問題になっておりますけれども、最初は「復帰なくしては沖繩の戦後は終わらない」ということでありましたし、復帰後は「首里城の復元なくしては沖繩の戦後は終わらない」というのが多くの県民の声でございました。私が就任をいたしました前の年に、「首里城復元期成会」というのができまして、取り組みが始ったのでありますけれども、長い時間がかかりました。と申しますのは、まずなんとしても道路の整備

をしなければいけない。学校を建てなければいけない。下水道もきちんとしなければいけない。第一、雨が大変降りましても珊瑚の島でございまして全部流れてしまいますんで、多くのダムを造らねばならない。宮古も山がありませんで、セメントで固めたいわゆる溜め池を造るといふようなことであります。八重山でも石垣島から竹富島へ送水パイプを造りまして水を送るといふ仕事などいたしました。それから各島に一周道路を造りました。まあそんなことやこんなことで現在まで、この平成8年度予算までで約五兆円以上の金が沖繩に投入されております。このおかげですね、道路の舗装率、全国で第5位、水道の普及率は、全国第10位であります。そういうふうに、生活基盤・産業基盤は作り上げましたが、もうひとつ先程申しました、公共事業・教育施設、医療施設等には金をどんどん入れましたけれどもそっちの方が忙しくて、首里城を復元するというのは大変な難問題・事業でございました。しかし復帰十年目の昭和五十七年、私が復元委員長となりまして、国営公園として首里城公園を復元することになりましたのが、二年後の五十九年でございました。世はこれを「植木構想」と呼んでくれております。一つの県に国営公園というのは一つしか作れないんでありますけれども、既に海洋博覧会の跡地を国営公園にしておりましたので、これを一本化し、「国営沖繩記念公園」の中に「海洋博公園」と「首里城公園」の二ヶ所を設置するというのが、所謂「植木構想」でございました。

まあこのような努力をしながら、いわば琉球文化の象徴である、首里城、北殿、南殿、奉申門を昔のままに復元をしたのが平成4年のことでございました。まだまだ完成には時間がかかります。しかし作業はどんどん進んでおります。

終りに、沖繩を見る時、沖繩の人々の心を知ってあげなければいけないということを申し上げたい。長い歴史、琉球独立論がまた出てきているぐらい長い琉球の歴史があり、そして日本領土となり、そしてその後は戦争でやられてしまい、現在はああして非常に広い土地を基地化されている。十二分にそのいろんな歴史を理解している人でさえも、やはりまだ自分たちは依然として本土の人たち、本土の政府には理解されていないと、先程西銘さんのお言葉を引用いたしましたけれども、まだ日本人になりきれないという心があると、いうことを知っていただきたいと思うのでございます。

で、これから沖繩をどういうふうな街づくりしていくか。東西の冷戦も終わりました。まだ中国や、特に朝鮮半島の問題がございます。しかも、あの場所が軍事的な基地として最高の場所であるということ、もう軍人の人たちのみならず、いろいろな戦史戦略を知っている方々にとっては、もうあれは置いておかなければならないものだという事になっておりますが、やがて普天間も返され、そして将来国際状況の変化に応じだんだん縮小整理されていくことを信じております。

そのときには、ちょっと沖繩を中心にした地図を考えていただきたいと思ひます。北の方に日本の本土及び中国やソ連がございます。南の方には広い広い東南アジアの国々があります。右の方には左の方には、というふうに考えていきましたならば、ただ単なる亜熱帯地域であるというだけではなしにですね、やはり将来の国際的な位置、特に東南アジアがこれからどんどん開発が進んでいくときでございますから、またこれから通信・情報などももっともつと発展していくところでございますから、そういうところの中心な場所として、沖繩県民にひとつの役割を担っていただくというふうにしていくのが、これから我々の務めではなからうかと、こういうふう存じます。

充分に思っていることを全部お話しすることはできませんでしたが、まあ、長い間の沖繩とのお付き合い、沖繩県民とのお付き合いを通じて、考えておりますことの一端を申し述べまして、私の責任を果たさせていたただきたいと存じます。

ご静聴ありがとうございました。

この講演の翌九年四月、勲一等旭日大授章受章。

九年十一月、沖繩都市モノレール着工。十年五月、沖繩ファンクラブ会長に就任。

なお平成十年度までの沖繩開発庁予算の総計は六兆一千五百億を超えています。

(日本教育協会会長兼理事長他・元参議院議員・元国務大臣)